

## 鶴岡市長選で皆川氏再選

### 市議選は定数4減のなか、得票数・率伸ばし

### 共産党は4人当選！ 山田氏惜敗



支持者と当選を喜び合う皆川市長（11日0時30分頃）



選挙戦の報告をする共産党鶴岡市議団ら（11日午前・荘銀タクト前）

10日投開票の鶴岡市長選挙で、当落の結果が判明したのは11日の午前0時19分でした。

23時30分現在の開票97・31%の時点で、佐藤氏が3万3600票、皆川氏が3万3400票と、200票差で負けていました。

残り1300票余りであり、加藤鉦一氏は皆川氏の落選を覚悟し、事務所に駆けつけました。

ところが、着いた途端に、120票の僅差で勝利の報が入り、歓声が湧き起こりました。重苦しい雰囲気でも、誰も口を開かずにはいた参加者たちが、一転して喜びに湧き上がりました。

大逆転劇のまさにドラマチックな場面でした。

### 強大な組織とのたたかいに勝利

勝利の報を受け、皆川氏が参加者に囲まれて事務所に入りました。

皆川氏は「今回の選挙は大きな組織と、草の根の組織との対極にあるたたかいだ」と、選挙戦の様相を述べました。

日本共産党の関徹県議は、「強大な組織とお金を持った相手陣営とたたかいたが、市民が主役を貫く皆川市長は、歴史に新しい一ページを開いた」と祝意を述べました。

### 市議選で得票数を797票伸ばす

鶴岡市議選では、定数32から28に4減のなか、共産党市議団は現職5人を擁立しましたが、4人が当選し、山田守氏は次点で及びませんでした。

共産党は「皆川氏を支える党市議団の役割を前面に掲げてたたかいた、得票数を前回の8503票から9300票に797票増やし、得票率も前回11・7%から13・8%に伸ばしました。

「市民と野党の協力共同」の相乗効果です。みなさんのご支援に感謝申し上げます。

## 藤沢周平を読む⑨

鈴木重雄（八色木）

### ■入院生活

中目医師の紹介で、入院が東京都北多摩郡と聞いて、周平は東京と言っても田舎に行くのだと思い、気持ちも楽だった。

しかし、その頃は結核患者が多くて順番待ちで、申し込みから半年後の入院である。

兄が付き添ってくれ、先に送っておいた夜具の荷物を解いて寝かせると、周平を励まして、14時間の夜行列車で鶴岡に帰って行った。

周平の安静度は3度だった。渡された印刷物には、手洗いと洗面に行くほかは原則として横臥静養と書いてある。周平は、診察と病院の売店に行くほかは、規則を守ってじつとベッドに横になっていた。

風呂には入れず、週に一回ぐらい看護婦さんにお湯と石鹸で体を拭いてもらうのだった。入院前は自転車をこいでいた自分が、こんな悪かったのかと落胆した。

しかし規則どおりに寝ているのはそのせいばかりではなく、周りで話す東京弁に圧倒されて庄内弁で話すことが出来なく、小さく萎縮していた。そんなこととは知らず、同室のSさんは笑いなながら、安静度3と言っても廊下ぐらいいは歩いてもどうってことないよ、みんなやっ

てんだからと言っ

た。

手術は3回、右肺上葉切除に続いて、手術した側の肋骨を計5本切り取る補足成形手術が2回である。うまくいけば最初の1回で済むはずだったので、周平の手術はあまりうまくいかなかったことになる。

3度目の手術を告げられたとき、疲労の極に達してどうなるかと思っただが、周平は生き延びた。

看護婦や医師の献身的な治療のおかげで、翌年になって大部屋に移り、2時間以外は起きて読書も外に出て散歩するのも自由になった。

病院の背後の雑木林は春になると一斉に新芽がふき、地面には点々と野木瓜の花が咲いた。

病院の前は、遙か向こうまで続く麦畑で、風が吹くと海のうねりのようにゆれている。

周平はようやく自分が回復しつつあるのを感じた。そして勧誘されて俳句会に入った。他にも患者自治会の文化祭で上演する戯曲を書いたりした。

やがて退院前の独立療舎に移ると、職を探するために時々郷里に帰るようになった。しかし再就職の道は険しかった。



# 佐藤聡氏の政策提言集にある「スーパーシティ構想」って何？

鶴岡市長選挙に立候補した佐藤聡氏の政策提言集にある「スーパーシティ構想」って何？、という問い合わせがあります。

地域の課題を先端情報技術で解決する国の「スーパーシティ構想」の採択に取り組むとのこと。

その構想は危険だと指摘しているのが、堤未果『デジタル・ファシズム』（NHK出版新書、968円）です。

## 街ごと全て5G

菅義偉首相の「日本全国「デジタル化」計画」と、「デジタル庁の創設、教育や医療をはじめ街ごと全て5G（第5世代の高速・大容量）でつなぐ「スーパーシティ」、

スマホに「キャッシュレス給与」振り込み、1人1台のタブレットによるオンライン教育

これらが進むと、このままでは日本の資産が米中に支配され、一部の企業や、一部の人がだけ高笑いする時代が間近に迫っていると警鐘を鳴らします。

## セキュリティ手薄

それは何故か。国民の個人情報を守るセキュリティ対策が手薄なせいで、医療や年金、銀行口座、行動記録に購買履歴など、国民の個人情報を守っていた地方自治体の要塞が崩される。

「今だけ金だけ自分だけ」の強欲資本主義で、巨大IT企業に支配される、

自治体から「公共」が消え、公務員がいなくなり、ケースワーカーなどロボット化する、キャッシュレス社会のトップランナーである中国は、何を何処で買ったか、私生活が丸ごと監視されている、給与のデジタル払いで、不正利用されても預金者保護法はない、IT企業が教育を投資商品にするなど、危険性を知らず、安易にデジタル化を進めてはならないと言います。



## ひと

### 茨木のり子②

茨木と戸村さん 青山崇



茨木の詩に出合ったのは、同僚で元高校教師戸村雅子さん(写真)

を通してであった。

『茨木のり子への恋文』（2016年：表紙写真は茨木の見合い写真を出版し、翌年、第33回真壁仁「野の文化賞」を受賞した。

1970年代、自宅で「子どもの読書活動」を始め、庄内出身の児童文学者・赤木由子の共同研究など庄内に根ざした「本の文化運動」を多面的に50余年進めてきた。

現在「茨木のり子六月の会」事務局長である。

1990年頃から始めた茨木の研究は、夫・母・祖母たちの庄内がこよなく好きで、全身を通して歌い上げる茨木の人と詩に、先ず熱く「恋した」ことに始まる。

恋が高じて茨木宅を訪ねるまでに。二、三度、お目にかかりたい旨の手紙の後、初めて会う。

茨木の印象は「背筋をすうつと伸ばした大きい人」と書いている。

『茨木のり子の詩の佇まいは、庄内の風土



## ウワサに迷つな

どうも、ウワサが俺の耳に入るのが遅いとは、いつも感じている事なんだが。市長選挙のウワサは、勝敗を左右するまでもものになっていたと感じたんだ。

▲政策で審判を仰ぐのではなく、悪いウワサを流して勝とうとするその根性からして、その人は市長に相応しい人ではないと感ずるべきと思うんだが。もつと利口だと感じていた知人までがウワサに迷っていたんだつケ。後でどつちやいれだや・と聞きたいもんだが。

▲ウワサの根っこは、何処にあるかは関係なかるうが、市長が職員を大衆の前で「叱る」ということが、パワハラだ・との事のような。▲そこで思い出すのが、市長になった初年度にゴミ処理場の事での地元との話合いの事だ。

にわざしている。この言葉(後述の小田演出家の言が私の心を強くつかんだ)とも書いている。

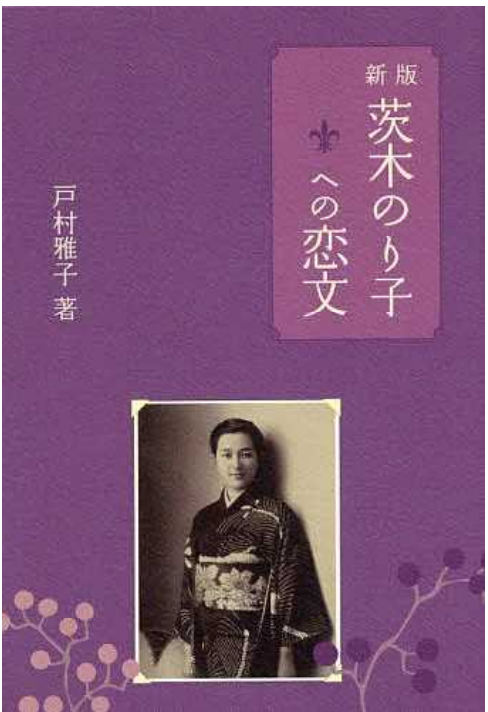
国士社掲載の書評である。

「詩人・茨木のり子が亡くなって10余年。母と愛する夫の故郷である庄内という切り口から、茨木のり子の人生、作品への影響などを親交の深い著者が熱く論説する。関係者への取材、貴重な写真などを織り交ぜ、資料的価値も高い。」

以前の地元との話し合いで、地元との約束事があったのが市長の耳に入っていなかったんだ。ならば当然「なぜそのことを俺に知らせなかった」となるのは当然でしょう。これでは話し合いにならないからネ。地元の人は呆れたでしょうヨ。

▲そこでの、当然に出た言葉や語気は知らないが、市長が知らなければ話し合いが出来ない程の大事な事を、知らせていなかった部長だか課長が、叱られたと取ったか注意されたと取ったかになるが。

▲当然これは・ごげらいだんだぜ。そんな類のことが市長の悪いウワサになつていたら、職員の仕事に問題が。市長は当然・一職員を叱るナンテしないよ。パワハラは管理職の泣き言なのか。退職者が組織だって流しているとか。鶴岡らしくないぜ。(石川)



戸村雅子著